

平成27年度 県内大学生が創る奈良の未来事業審査委員会

議事概要

1 日 時 平成27年7月24日（金） 12:30～16:00

2 場 所 奈良県議会棟 本会議場及び第2委員会室

3 出席者

荒井正吾委員長、栗山道義副委員長、岡本好央委員、音田昌子委員、佐藤滋委員、辻井利典委員、辻本俊秀委員、中野聖子委員、高橋真知委員、吉本清信委員

・県内大学生が創る奈良の未来事業審査委員会規則第5条の2の規定により、会議の開催が成立したものとする。

（第5条の2 委員会は、委員（委員長を含む。）の過半数の出席がなければ、会議を開き、議決をすることができない。）

4 公開・非公開の別

・プレゼンテーション及び質疑応答 公開（傍聴者 95人）

・審査及び選考 非公開

非公開理由：県内大学生が創る奈良の未来事業審査委員会運営要領第3条の規定による

（第3条 委員会は原則公開とする。ただし、審査及び選考については、奈良県情報公開条例（平成13年3月奈良県条例第38号）第7条第2号に該当する情報について審議等を行うため、非公開とする。）

5 概 要

<開会>

○知事挨拶

・通常は、議場では議会が開催されるが、本日は議場を、県内大学生が創る奈良の未来事業の審査委員会の場として使用させていただいている。議場は、民主主義の実践の場であり、議場で議長や理事者が声を出して発言したことが、政治意志になる。

・選挙権は、今後、18歳以上の若者にも与えられるが、民主主義は定着しているようで、定着していないというのが現状。民主主義の基本は、自分の意志を発言できる場で多数の賛同を得ることが基本であるので、今日はより多くの賛同を得られた意見、発表を最優秀賞、優秀賞とさせていただきたい。

・政治がどのような場でどのように行われているかという事を、ぜひ若い人たちに体験、体感していただきたいというのが基本的な考え方。様々な角度からの意見を展開してほしい。

・参加者の皆様には、ぜひ良い発表をしていただきたい。審査に参加していただく審査委員、関係者の皆様方には心から感謝申し上げます。本日は皆様よろしくようお願い申し上げます。

＜プレゼンテーション及び質疑応答＞

○県内大学生が創る奈良の未来事業審査委員会運営要領第2条の規定により、県内大学生が創る奈良の未来事業に応募した県内の大学等に在籍する学生（以下「県内大学生」という。）によるプレゼンテーション及び委員による質疑に対する県内大学生からの応答を行った。

（1）政策提案1

政策提案の名称：「緊急課題！奈良の将来の医療をつくる多職種医療学生の集い。」

提案者の在籍する大学等の名称：奈良県立医科大学

グループ代表者の学部・学科・学年・氏名：

医学部・医学科6年 峯 昌啓

○資料1に基づき、県内大学生グループよりプレゼンテーション

○質疑（荒井委員長）：

- ・医学生立場から、地域包括ケアシステムに関心を持っていただいたのは適切な視点であり、介護との接続を学ぶ、あるいは体感するというのは、きわめて良い方向だと思う。しかし、これは学校で教えていないから学生がすべきことなのか、それとも学校のプログラムにいれるべきなのか。また、地域包括ケアシステムの大きな方向は在宅医療であるが、終末期医療の考え方についてどのように考えるか。どのような医療を施せば、終末期医療と定義をしてよいか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・1点目については、学校で地域医療を学ぶ講義はあるが、講義の中では学生は主体性を発揮していないので、自分からアクションを起こさないと地域医療に対して深く考えていくことができないというのが実情。また、大学のカリキュラムでは、他学部と合同で授業を行うことが困難である。よって、自分たちが、県の支援を受けて、自発的に活動していくことが大事だと考えている。そして2点目については、どのように最期を迎えるのが良いかということであるが、それには最期を迎える人の希望が深く関与していると思う。今、高齢者の多くは、在宅で最期を迎えたいという希望をもっているが、病院で最期を迎える人も多い。よって、それぞれがどういう意志を持っているのかということをもっと把握して、在宅で迎えたいという意志があるなら、そうできるようにどのような課題があるのか、どのようなシステムを構築していくべきなのか議論していかなければならない。そういったことを自分たちが学生のうちから認識し、社会に出た時にそれをサポート、実行できるような取り組みをしたい。

○質疑（吉本委員）：

- ・25年間、地域包括ケアの推進に取り組んできた経験がある。また15年くらい前に、奈良県立医大の6年生に診療所でデイサービスや入浴などの実習に携わってもらったことがある。こういった活動は継続していくことと、評価することが大切であるが、私自身はその学生が15年後どのようにしているのかということを知らない。そういった評価方法についてどのように考

えるのかということをお教えいただきたい。

応答（県内大学生グループ）：

- ・この取り組みを評価するのは本当に難しいと思う。というのも、本当に結果が出るのは10年後であるが、それには、10年後に地域包括ケアシステムが、現状よりも質的に良くなっているということと、そこに不足している量的なもの（医師など）が増えているということが必要。ただし、そこにいくまでのステップとして、まず質を良くするために、地域包括ケアシステムの質というものがどういうものなのか、そしてその質を良くするためにどのような課題があり、その課題をどのように解決していくのかということについて、自分の答えを持っていなければならない。よって、この1年としてはまず地域医療に興味をもつ人を増やし、彼らに地域包括ケアシステムの質やその向上方法について考えてもらい、それを実践に移して行ってもらいたいと思っている。そして、それらの取り組みが地域包括ケアシステムの質の向上につながれば、それを評価したいと考えている。また、勉強会は毎回人数制限をする。これがどれだけ有効になるかということは、10年後にならないとわからないが、知る人が多ければ多かれ程、効果として期待できるので、なるべく多職種の学生を巻き込んで、学生が楽しいような取り組みをすることによって、質的なものの増加につなげていきたい。

○コメント(栗山副委員長)：

- ・今、地域創造とか地域創生とか言われているが、基本的に、医療や看護、そして介護は縦割りなので、横の連携をとるのがなかなか難しい。これはこの分野だけではなくて、他の分野にもいえること。一番のポイントは、この分野においても、高齢者やその家族、そして地域の立場に立ってみる、そしてそこから医療や介護はどうあるべきかを考えることが重要。また、皆様のようになんか様々な経験をして、それを認識し、次のステップにつなげていくということもとても大事なこと。非常にいい切り口で大きな課題だと思う。

○質疑(岡本委員)：

- ・県に何を期待しておられるのか。大学に呼びかけてほしい、お金を出してほしい、場所を提供してほしいなど、行政にどのようなことを期待しておられるのか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・今、おっしゃられた3点は全てお願いしたいところ。特に海外に行くということには費用がかかるので、その点で援助してほしい。それと、県が応援してくれているというメッセージはとても大事だと考えている。活動を行っている私たちとしても、人をどれだけ集められるかということがターゲットになると思っている。

(2) 政策提案2

政策提案の名称：「不登校の子どもたちに大学生ができること～大学間の垣根を越えて～」

提案者の在籍する大学等の名称：帝塚山大学

グループ代表者の学部・学科・学年・氏名：

大学院心理科学研究科心理科学専攻2年生 酒井 希恵

○資料2に基づき、県内大学生グループよりプレゼンテーション

○質疑（荒井委員長）：

- ・この提案について、不登校の子どもをなくすために大学生が垣根を越えて集まって勉強するという印象を受けるが、実際には不登校の子どもは小学校や中学校にいるわけであり、彼らにどのように具体的に働きかけていくのかというインターフェイスの事例が出てきていないように思う。その点についてはどのように考えておられるのか。現場でどのようなことをすれば不登校がなくなると考えておられるのか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・私も実際に5年間、別室登校の学生の支援を行っていたことがある。まず教室入り込み方支援という支援の方法があるが、大学生は小学生や中学生と年齢が近いということがまず1つの大きなメリットになると考えている。教師に言えないことも、年齢の近さから大学生になら話せることもあるだろうし、大学生から学校側に報告することもできる。また、既に別室登校になってしまっている学生に対しては、一緒に別室で時間を過ごすことによって、関係をつくることができる。自らの経験では、実際にそのようにして教室に戻ることができた学生もいる。

○質疑（辻井委員）：

- ・日本の場合、子どもにボランティアをつけるということが不安な方もいらっしゃると思うが、その点についてはどのように考えるか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・マッチングサポート委員会のメンバーには大学教員や外部講師の方も含まれており、学生の独断と偏見で活動するという事ではないので、常に専門家が後ろについているということをお伝えしていきたい。

○質疑（音田委員）：

- ・家庭にも様々な問題があり、マッチングサポート委員会ではそれらにどのように対応していくのかということが見えないが、そのあたりはどのように考えているのか。また、奈良県のボランティア意識を向上させるとおっしゃっていたが、それはこの活動に学生だけでなく、県民の方にも誘いを向けるということなのか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・1点目であるが、マッチングサポート委員会は、どの学校にどの学生を派遣するかということに焦点を置いているので、家庭での問題は学校の教員とボランティアの連携だと考えている。マッチングサポート委員会は、あくまで派遣の段階の委員会だとお考えいただきたい。2点目については、もちろん大きくなれば、後々の検討課題になってくるが、現時点では学生の間でこの委員会を広めようということであり、学生が主体の委員会だと考えている。

(3) 政策提案3

政策提案の名称：「奈良の管理栄養士のたまごが考える災害時の健康維持のための食事」

提案者の在籍する大学等の名称：畿央大学

グループ代表者の学部・学科・学年・氏名：

○資料3に基づき、県内大学生グループよりプレゼンテーション

○質疑（荒井委員長）：

- ・災害時の食糧供給は、水も含めてきわめて大事で、その点は十分に引き上げられているとは思えない。どのように備えるのかということは難しい課題であるが、備える際には、意識をどのように持つかということと、実行体制の備えをどうするかということの2つを考える必要がある。備える意識については、備えることにより安心、満足感を得られるとおっしゃっていたが、災害はいつ起こるかわからないので、緊張意識を高めリスク感覚を持つことも大事である。災害に備えるにあたり、どのような意識を持つのがよいと考えるか。また、実行体制については、全員が備えるというのは難しいと思うが、全員がそのように備えないといけないのか、それとも誰かが備えるシステムをつくっておけばよいのかお聞きしたい。

応答（県内大学生グループ）：

- ・満足度とは、県民の方々の奈良県の政策に対する満足度を意味している。また、不安については、災害は全ての人が不安だと思うが、少しでも備蓄をしているという安心感があればよいのではないかという意味で提案させていただいた。

○質疑（中野委員）：

- ・災害時対策の料理教室の参加者はどのような方をイメージされているか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・料理教室は対象を特定しているわけではないが、これから考えていきたい。

○質疑（栗山副委員長）

- ・最近、各市町村には自主防災組織があるが、自主防災組織の危機意識は住んでいる場所によって全く異なる。皆様の提案されていることが効果的に行われそうな地区など研究しているか。

応答（県内大学生グループ）

- ・実際に、他県や南部などのことは調べていない。

（4）政策提案4

政策提案の名称：「多世代で行う「昔遊び」「今遊び」 in 平城宮跡&奈良公園」

提案者の在籍する大学等の名称：奈良教育大学

グループ代表者の学部・学科・学年・氏名：

教育学部・保健体育専修3回生 千葉文乃

○資料4に基づき、県内大学生グループよりプレゼンテーション

○質疑（佐藤委員）：

- ・大変面白い提案だと思うが、自分の子どもの時を思うと、大人と一緒に遊ぶことは楽しいのか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・子どもから大人までが同じ場所で一緒に遊ぶことにより、高齢者や大人から子どもに遊びを伝えることができ、また新しい発想などを通して、子どもから大人に刺激を与えられるのではないかと考えている。

○質疑（音田委員）：

- ・期待する効果としてあがっている、人口の増加や体力増強につなげるには、一過性のイベントだけでは少し難しいのではないかと思うが、その点についてはどのように考えるか。

応答（県内大学生グループ）

- ・今回の企画によって、公園を使った遊び方を伝えることにより、地域の公園などでも実践する人が増えるのではないかと思う。また、公園で遊んでいる人々の姿がみられなくなったら、こういった企画を再度実施し、運動人口を増加させることができるのではないかと考えている。

○質疑（岡本委員）：

- ・この提案は遊びが目的なのか、それとも高齢者や子どもの運動が目的なのか。特に高齢者だが、年齢を重ねると身体や意識も動かなくなり、意欲もなくなるが、どのような対策が考えられるか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・今回の目的としては、多世代での交流と都市公園の有効活用ということが中心で、それを通して運動量の増加、体力の増進というように良い方向につなげていきたいと考えている。2つ目の質問に関しては、子どもの遊んでいる姿を見て、おじいちゃん、おばあちゃんが喜び、元気をもらえるのではないかと考えている。また、簡単な遊びであれば、身体が上手く動かせないという方でも参加していただけるのではないかと考えている。

○コメント（栗山副委員長）：

- ・発想がすごく面白い。この提案のねらいは、健康、運動ということももちろんあるが、世代を超えて対話ができるというのは、良い着眼点である。このような世代を超えた交流を、今後、地域にどのようにして広げていくかということも考えていただきたい。

○質疑（高橋委員）：

- ・実際に、どのような方を対象に周知していきたいか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・奈良教育大学附属小学校や中学校の生徒、親、その地域に住んでおられる方に周知していきたいと考えている。

○質疑（辻井委員）：

- ・昔遊びということで、奈良にちなんだ遊びを考えるとしたら、具体的にどのような遊びを考えるか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・奈良にちなんだ遊びという事では調べきれていないが、「隠れ鬼」というものがあり、これをアレンジして、例えば着物を着ておにごっこをするといったことも面白いのではないかと思う。

(5) 政策提案5

政策提案の名称：「女子大生ハンティングサークル（狩りガール）」

提案者の在籍する大学等の名称：奈良女子大学

グループ代表者の学部・学科・学年・氏名：

大学院人間文化研究科博士前期課程住環境学専攻1年 竹村 優希

○資料5に基づき、県内大学生グループよりプレゼンテーション

○質疑(荒井委員長)：

- ・狩りガールというのは、実際に女の子がハンティングするのか。

応答(県内大学生グループ)：

- ・この事業を発想した時は、参加者が狩猟免許を取得すると考えていたが、実際に猟友会の方にお話をお聞きすると、約3年かかるとのことだったので、最初はまず狩りの方法について学び、そこから実際に狩猟免許を取りたいと考える学生が現れるとよいと思っている。

○質疑(岡本委員)：

- ・産業化のための障害で、解体処理施設の整備以外にあれば教えていただきたい。また、獣害被害には批判があり、鹿やいのししが食べるどんぐりや木の実類は広葉樹からとれるものであり、針葉樹からはとれないということが問題だと言われている。そして2つ目に、日本オオカミがいなくなってしまったことにより、鹿やいのしが増えてしまったという批判がある。これらの批判についてはどのように考えるか。

応答(県内大学生グループ)

- ・1点目に関しては、解体処理施設の問題だけを障害として考えており、その他についての障害は特に考えていない。2点目に関しては、獣害被害を取り除くには、まず森林の対策をしていかなければならないと私も思っている。ただ、この事業は獣害を減らすということではなく、狩猟を地域産業に位置づけるということを目的としている。

○質疑(辻本委員)：

- ・鹿やいのししの肉を特産品扱いする場合は、安定的な供給ができないといけませんが、それについてはどのように考えているか。また、獣害という議論が出てくると、十津川村や野迫川村だけではなく、中山間地域、奈良盆地の周辺も多いが、それについてはどのようなイメージを持っておられるか。

応答(県内大学生グループ)：

- ・今回の提案は、獣害被害をなくすということを第一の目的としているのではなく、まず地域の活性化ということに重点を置いているので、それに沿った提案をさせていただいた。

○質疑(辻本委員)：

- ・例えば、銃を使う場合は、1時間以内に肉を解体処理しないと肉の質が悪くなるという問題があるが、罠を使った場合は、時間に限らず処理ができるわけだから、野迫川村に解体処理施設をつくる必要性をあまり感じないが、その点についてはどのように考えるか。

応答(県内大学生グループ)：

- ・五條市の施設を使うということも一度検討したが、野迫川村の方と話し合いをした結果、自分の村に施設をおいて、処理することができるしくみをつくりたいとおっしゃっていたので、こちらの提案をさせていただいた。

(6) 政策提案6

政策提案の名称：「五感を刺激し六感に訴求する地域派生型ブランド戦略事業－奈良名産三輪素麺を事例として－」

提案者の在籍する大学等の名称：奈良女子大学

グループ代表者の学部・学科・学年・氏名：

大学院人間文化研究科食物栄養学専攻博士前期課程1年 橋本 瞳

○資料6に基づき、県内大学生グループよりプレゼンテーション

○質疑（岡本委員）：

- ・三輪そうめんという産地表示、この定義について質問したい。三輪そうめんとは、奈良でつくられたそうめんのことを指しているのか、生産地に関わらず、三輪から出荷されたら三輪そうめんと言ってよいのか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・先日、三輪素麺工業協同組合の方とお話しした際に、現在は地理的表示制度というものに注意し、三輪でつくられたものを三輪そうめんとして販売していく流れをつくっておられるとお聞きした。

○質疑（岡本委員）：

- ・しかし、銘柄表示は三輪そうめんではなくても、社名に「三輪そうめん」と書いてあることがある。この点についてはいかがか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・社名の問題については、申し訳ないが少々知識不足であり、お答えすることができない。

○質疑（辻本委員）

- ・子孫繁栄一本そうめんというものを提案されていたが、来年1年でそれが実現できるのか。実現の可能性を教えてください。

応答（県内大学生グループ）：

- ・実現可能性については、業者の方にお聞きしたところ、可能であると答えいただいた。

○質疑（荒井委員長）：

- ・そうめんを使ったイベントはあまり奈良にはないが、そのようなイベントについてはどのように思われるか。例えば、流しそうめんのイベントで、竹筒ではなく、吉野杉の筒を使うというのはどうか。それと、そうめんのレシピでは、大和野菜の天ぷらと一緒に食べるのが一番おいしいと個人的に思っているが、提案していただいたレシピは凝った内容のレシピが多かったように思う。それも良いと思うが、この点についてはどう考えるか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・奈良ではそうめんのイベントがたくさん開催されていると思っていたので、あまり開催されていないということに驚いている。流しそうめんの材料に使う竹についても、奈良県産のものを使用することができれば、ぜひ取り入れたい。レシピについては、様々な方が挑戦されるということだったので、応用的なレシピを提案したが、三輪そうめん自体の味を活かすレシピも考えていきたい。

○質疑（栗山副委員長）：

- ・街角には、ラーメンやそば、カレー、うどんといったお店は多いが、そうめん屋さんというのはあまり見かけない。そうめんはそういった意味でも、そうめんであるというだけで差別化になるのではないかと思うが、それについてはどう考えるか。

応答

- ・おっしゃる通りそうめん屋さんというのは、全国的に見ても少ないと思うが、それにも長所と短所があり、全国にお店がないからこそ地元の方はそれぞれの家庭の味を大事にしてきたのではないかと思う。その中に今回提案した子孫繁栄そうめんなどを新しいレシピとして取り入れ、家庭の味として味わっていただければと思っている。

(7) 政策提案7

政策提案の名称：「かえろうら！十津川～空き家のD I Y改修&活用プロジェクト～」

提案者の在籍する大学等の名称：奈良女子大学

グループ代表者の学部・学科・学年・氏名：

大学院人間文化研究科住環境学専攻1年 森 里沙

○資料7に基づき、県内大学生グループよりプレゼンテーション

○質疑（辻井委員）：

- ・十津川村に住むということを前提に、皆様が考える十津川村の最も大きな魅力とはなにか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・まず1つ目は都市にはない自然である。美しい山々やきれいな星空などは大変魅力的だと思う。そして2つ目は、決めたことはすぐに実行するという集落の人々のすばらしさ。私たちとの協働もすぐに受け入れてくれた。

○質疑（岡本委員）

- ・改築するというのは非常に困難な目標であり、専門的な能力が必要になると思うが、現実にはできそうなのか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・建物自体は十分に使える状態であるので、掃除をしたり、草刈りをしたり、できることからこつこつやっつけていこうと考えている。

○質疑（高橋委員）：

- ・1回の参加者が9人と人数が限られている中で、9人の方は毎回参加されるのか、それとも毎回新規で参加されるのか。また、大学生を対象にするということは、仕事を探す必要があると思うが、どのような仕事をするのが可能か教えていただきたい。

応答（県内大学生グループ）：

- ・まず、参加者の募集についてであるが、参加者は各回募る予定。9名という人数制限であるが、それはワゴンタクシーの定員で、五條市から十津川村に移動する際の定員が9名であるので、9名とさせていただいた。仕事に関しては、十津川村には、想像されるような林業や農業、また観光施設の従業員といった仕事も存在すると考えられるが、近年の若者の働き方は変化してきており、例えばネット環境が整備されていれば、在宅で事業を起こしたり仕事をしたりするということも可能である。また、無農薬の野菜や自然のものを移住してきた方がさらに付加価値を加えて、村の魅力を外に発信していくということも考えられる。

<審査・選考>

- 「県内大学生が創る奈良の未来事業審査委員会運営要領」第2条の規定により、委員による審査及び選考を実施し、最優秀賞2提案、優秀賞2提案を選考した。

・最優秀賞：

政策提案1

政策提案の名称：「緊急課題！奈良の将来の医療をつくる多職種医療学生の集い。」

提案者の在籍する大学等の名称：奈良県立医科大学

グループ代表者の学部・学科・学年・氏名：

医学部・医学科6年 峯 昌啓

政策提案5

政策提案の名称：「女子大生ハンティングサークル（狩りガール）」

提案者の在籍する大学等の名称：奈良女子大学

グループ代表者の学部・学科・学年・氏名：

大学院人間文化研究科博士前期課程住環境学専攻1年 竹村 優希

・優秀賞：

政策提案2

政策提案の名称：「不登校の子どもたちに大学生ができること～大学間の垣根を越えて～」

提案者の在籍する大学等の名称：帝塚山大学

グループ代表者の学部・学科・学年・氏名：

大学院心理科学研究科心理科学専攻2年生 酒井 希恵

政策提案7

政策提案の名称：「かえろうら！十津川～空き家のD I Y改修&活用プロジェクト～」

提案者の在籍する大学等の名称：奈良女子大学

グループ代表者の学部・学科・学年・氏名：

大学院人間文化研究科住環境学専攻1年 森 里沙

<選考結果発表・表彰>

- 荒井委員長より、最優秀賞2提案、優秀賞2提案を発表し、賞状と副賞を授与した。

<審査委員長講評>

- 荒井委員長より、講評を行った。

- ・今年の提案は全てが優秀であり、着眼点がそれぞれ非常にすばらしかった。点数は大変僅差で、とりわけ1位と2位は同点であったので、最優秀賞を2つとした。3位と4位も僅差であったので、優秀賞とした。
- ・ご提案いただいたそれぞれの政策については、今後、政策の参考とし、最優秀賞及び優秀賞については、来年度の予算化に向けて、県の担当部局と協議をさ

せていただきたい。

- ・本日はご参加いただいた審査員の皆様、また関係者の皆様に感謝申し上げます。
また、来年もよろしくお願ひ申し上げます。

<閉会>